第7回 作文コンクール

心のふれあい大賞

入賞作品集

主 催 公益社団法人 福岡県医師会　**共 催** 福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後 援 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会
北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）

目　次

主催者あいさつ……1

入賞作品紹介

一般の部　最優秀賞……川村江奈さん　2

一般の部　優秀賞……古野義臣さん　4

一般の部　優秀賞……S・Hさん　6

中高生の部　最優秀賞……松元章浩さん　8

中高生の部　優秀賞……石山由理さん　10

中高生の部　優秀賞……松元那和さん　12

小学生の部　最優秀賞……新田一叶さん　14

小学生の部　優秀賞……伊藤利花子さん　15

小学生の部　優秀賞……三浦一真さん　16

小学生の部　優秀賞……平川沙英さん　17

選考委員……18

募集要項……19

主催者あいさつ

公益社団法人 福岡県医師会
会長 **松田　峻一良**

福岡県医師会作文コンクール「心のふれあい大賞――わたしのまわりの医療体験」は、医療従事者と患者、そのご家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて、その体験記を募集するものであり、七回目を迎えました。

今回は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、今までの日常と異なった対応をしなければならない環境下で限られた時間の中、小学生から一般の方まで合計一三三点ものご応募を頂き、誠にありがとうございます。

今回の入賞作品から、コロナ禍でこれまで当たり前だった人との関わり方が変わろうとする一方で、病気と戦っている患者と家族、医師や医療従事者とのコミュニケーションや結びつきなど、変わることのない人と人とのふれあいや温かさの重要性を改めて感じる事ができました。

このような実際の体験に基づく貴重な声に接することは、新型コロナウイルス感染症の収束が未だ見えない中、我々医療関係者にとっても大きな励みと気概に繋がると期待しております。

選考の結果、一般の部・中高生の部・小学生の部から最優秀賞、優秀賞あわせて十名の方を、表彰させていただきました。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響で残念ながら表彰式を開催することが叶いませんでしたが、受賞者の皆様に心よりお祝い申し上げますとともに、本コンクールにご応募いただきました方々、またご支援賜りました関係者の方々にも厚く御礼申し上げます。本冊子では、受賞者の方の作品を紹介させていただきますので、ご高覧いただけますと幸いです。

一般の部

最優秀賞

福岡市
川村 江奈

「さいごのプレゼント」

令和二年七月十一日、父は静かに旅立ちました。腹膜がんと診断されてから約四ヶ月。それは闘病というには、あまりに温かく穏やかな時間でした。

痛みなどの症状がないことや八十五歳という年齢と体力面を考慮し、手術や投薬治療はせず自宅で緩和ケアを行っていくという方針に。病院で在宅医療を紹介していただき、毎週一回、先生と看護師さんが週交代で来てくださることになりました。

父が癌と診断されても我が家の生活に特に変化はありません。ただ、父に穏やかに過ごしてもらいたいということだけでした。そのためには、自宅で過ごすという選択は非常に重要なものだったと思います。

本当に癌なのかと思うほど、父は痛みを訴えることがありませんでした。自分の足で歩くことは出来ていたし、先生が診療に来てくださっても「痛みはない、ただ眠い」と言うだけです。それでも徐々に食欲が落ちていき、横になりたいと言うことが増えてきました。

父が急変したのは、六月六日のことでした。妙に鼻水が出ていて、頻繁に咽ていたのです。それから震えがきて呼吸が荒くなってきた為、慌てて先生に電話をしました。そして、三十分程で来てくださった先生に「肺炎の症状が出ているので、もって一週間ほどではないか」と伝えられました。父と過ごす時間が残り少ないということは覚悟していましたが、こんなに早いのかと涙がとまりませんでした。それでも最期まで出来る限りのことをしようと気持ちを整え、マッサージをしたり背中をさすったり、父の身体に触れる時間を増やしました。そしていつ「その時」が来てもいいようにと様々な準備をしておきました。

それから数日、驚くことに肺炎の症状は改善しました。ただ、介護ベッドで寝たきりの状態になってしまった為、先生は週二回、それ以外の日は毎日看護師さんが来て身体をケアしてくださることになりました。自宅で仕事をしている私は、先生の優しく穏やかな口調や看護師さんの明るい声を聴きなが

ら、こんなにも穏やかな終末期があるのだなと有難い気持ちで心がいっぱいになっていました。

約一ヶ月後の七月十一日未明、父の呼吸が止まりました。すぐに気が付いた母が電話をし、夜明け前にも関わらず素早く駆けつけてくださった先生が静かに臨終を告げました。亡くなる二日前まで呼びかけに反応して微笑んでくれたり、ケアを終えて帰られる看護師さんに手を上げて挨拶をしたり…最期まで痛みを訴えることも苦しむこともなく、本当に穏やかで静かな旅立ちでした。それから看護師さんも到着し、父へ最後のケアをしてくださいました。いつものように明るく、丁寧に。

もって一週間と告げられてから、一日一日がとても尊い時間となりました。食事ができず点滴と僅かな水だけだったのに、一週間どころか一ヶ月も頑張ってくれるなんて、「このようなことは非常に珍しい」と先生も仰っていました。旅立った日は雨の予報から一転して青空が広がり、すべてが父の生き様を表しているなと感じました。

父がいなくなってしまったことは、言葉では言い尽くせないほど寂しい出来事です。ただ、寂しさよりも大きな感情として「感謝」があります。このコロナ禍で、家族に看取られながら自宅で静かに眠ることができた父は、とても幸せだったのではないかと思います。私たち家族にとっても本当に有難いことでした。これもひとえに、誠実に丁寧に向き合ってくださった先生、常に明るく温かかった看護師さんたちのおかげです。この在宅医療チームのきめ細やかで献身的なサポートがあったからこそ、私たちの心身の負担が大きく軽減されました。対患者だけではなく、対家族として寄り添っていただき、感謝しかありません。

この大切なご縁は、父がくれた最後のプレゼントだと思います。このように強い信念を持って人生の最期に寄り添ってくださる方たちがいると知ることができた。これは私にとって、大きな出来事です。

生前、父に「やっぱりお父さんも最期は家がいい？」と聞いた時、迷わず頷いたのを昨日のことのように覚えています。多くの人が抱くであろうその願いは、家族だけではなかなか叶えてあげられないことです。二十四時間体制でサポートしてくださる在宅医療という制度があるからこそです。

一人でも多くの人が、最期を迎える場所を選択することができる世の中であってほしい。在宅医療がもっと広がってほしい。その為に、自分のこの経験をたくさんの人に伝えていきたいです。

そしていつか私も、父のような最期を迎えられるよう、日々を大切に生きていこうと思いました。

一般の部

優秀賞

飯塚市
古野 義臣

「奇病と出会い」

脳腫瘍摘出

（馬面で奇病発見）

当時私は四十九歳剣道四段の中学校教師。四十四歳で親爺遺伝の糖尿病予備軍と判定されていたが剣道部の指導もしている元気な中年だった。福岡民医連新飯塚診療所友の会の副部長も引き受けていた。

ある日「糖尿病の権威者がこられますから診てもらいませんか？」と電話。鼻髭の先生かと思いきや三十過ぎの女医「I先生」。自己紹介後私の顔を見つめて数分間「顔が長いですね」と連発。長いのは自覚しているが「糖尿と馬面は関係あるんですか」とやゝむかついた。「あっ説明しなくて御免」と開（ひら）いてくれた医学大辞典「末端肥大症」の部に〈脳下垂体に腫瘍が生じその刺激で最強の成長ホルモンが出過ぎインシュリンを押さえて糖尿病になる〉と。成長期なら巨人病に。以後だと顎手足が伸び鼻が太るらしい。猪木の顎や、馬場の三十二文キックが目に浮かんだ。

「最近開頭手術で頑固な糖尿病が嘘みたいに治ったそうですよ。決心しませんか？」

その後いろいろ検査。腫瘍は未確認だったが、正常は四の成長ホルモンの値が十倍の四十を越えている。決断せざるを得ない。

（K病院入院）

一月K病院入院。血糖値を下げて脳外科に転科。一時退院。再入院して腫瘍確認五月手術と決定。珍らしい症例らしく研修医の卵が次々話しにくる。顔なじみも沢山できた。

私が〈狼男〉と名づけた夜半跳ね起きて騒ぐ奇病の若者がリーダーで「頑張れ！頑張れ！オヤジさん！」のシュプレヒコールに見送られて手術室へ。心配された三ミリ横の視神経を傷つけず八時間後無事に目覚め成功。朝早くから夕方遅く迄控室で祈り乍ら待っていた家族を安心させた。

造影剤排出の為大量の水を飲めと云う。脳下垂体は排尿の指令塔と云う。頭を動かすと割れるように痛むから横になったまゝ排尿練習しておけと脅されていたが舐めていた。さあ大変出ない！苦しい！我慢しきれずそっと起き上ったら大量に放出。あの壮快感は今も忘れない。

血に染まったタンポンとガーゼでう

ず高く盛りあがった鼻を見て「天狗だ！」と狼男はゲラゲラ笑い、「化物みたい」とナースにからかわれ乍ら順調に快復していったが、その間の沢山のふれあいから感動と悲哀を味わった。

（病室の人達）

※左手が終日上下に動いて止まらない一級建築士だったと云うおじいちゃん。手術の翌日喫煙室にかくれて左手に煙草を挟みプカリプカリとふかしてる。奇蹟みたい。切れていた頭の中の神経がうまくつながったらしい。ナースにすぐ見つかり連行されて行った。

※高校二年男子身長私と同じ一七五。剣道二段。息子みたいな愛情が湧いた。脳の奥の腫瘍は摘出不可能であと一年の命ですと、こっそり涙ぐんでたお母さん。トイレにも車椅子。患者が手伝うのは禁止と云うので控えていたがナースが支えきれず二人して転倒。それ以後私の手伝いが黙認。男女同級生数人の見舞客と明るく談笑していたが、一人になると毛布を被って泣声をこらえていた。〝彼と別れの時〟さよならの言葉がでない。握手したまゝ泣いた。神も仏もいないのか!!

※会社社長。堂々とした柔道三段の四十才。手術しなければ半年。しても一生寝たきりかも知れないと予告されていた。長時間の術後案じて忍びこんで声をかけた。神経が切れて目迄ふさがってる瞼を押しあげて「生きてますよ古野さん。」それからのリハビリが凄かった。自力で三十分壁伝いに歩いてトイレに行く。誰も手伝わせず見守る。毎日来院して厳しいリハビリを支え続ける大学生の息子。その努力と生命力に感動し乍ら応援してきた皆に見送られ、杖もつかず自力歩行で退院した。

脳外科の病室にはしゅんとしてくる見舞客もこの病棟の明るさに笑顔で帰って行く。そんな前向きな雰囲気の中で血糖値も落ちつき私も無事に退院した。

（教育の現場にもどって）

退院後カウンセラーの役を引き受けた。この体験談をちりばめ乍ら荒れ気味の教育現場の為に非行分析、いじめ、家庭教育の要点、生と性等々毎週一回（ともし灯）通信を始めた。学級担任を通して全家庭にも。次第に家庭からの反響が帰ってくる。担任は（ともし灯）をホームルームの話題や議論にしてくれていた。担任不在の時は私が受持つ。

お母さんの胎内にいる時から生じた脳腫瘍で余命一年と云われつゝ育った可愛い赤ん坊の話。前述の高校生の話等はさすがに静かに聞いてゐた。

私はいつも何にも増して生命の大切さを強調して語る。

あれから四十三年。奇病を指摘し、稀有の体験への後押しをしてくれたI先生へ今更乍らの有難うを声を大きくして感謝しています。

一般の部

優秀賞

福岡市
S・H

「白衣の天使」

またか。私はそう驚きもせず人間ドックの結果の入った封書の中の紹介状を取り出す。健康診断を受けるたびに帰ってくる診断書の「要精密検査D」の赤い文字にも動揺は無い。何度となく、再検査で良性のしこりなので様子を見ましょうと言われてきた。「なんて病院だったかなぁ。」私は夫の転勤で引越しを繰り返していたので福岡に居た頃再検査に行った病院の診察券を探した。仕事を始めたばかりで休みはとれない。年初めは一月四日から検査できるとのことで年末年始の休暇中であったため予約をしておいた。誰も正月早々検査なんか行かないのだろうと思うと面倒ではある。しかし去年は転勤の日程が決まるのが遅れ人間ドックを受けそびれていた。

「仕方ない。」買い物ついで位の気持ちでその日私は病院に向かった。

超音波検査技師の女性の眉が微かに動く。

「何かありますか？」と問うても「医師から説明がありますから。」と画像の映し出される機器の画面から視線を離すことなく撮影は続いた。不安を煽らないようにと配慮されているのだろうとそれ以上は聞かずに待合室に移動した。医師は六年前の受診なのでカルテは無いが画像データがたまたま残っており、比べると明らかに六年前には無いしこりが有ると言う。「乳癌で間違いありません。」はっきりと診察室に響いた。

中学生の息子と娘に私の病気や治療については伝えたものの、心配をかける訳にはいかないと仕事も家事も普段通りに過ごしてみせた。その後続く細胞診やMRI等の色々な検査を受けるたび私の乳癌は動かしがたい現実となっていった。手術の空き状況から逆算して入院の日程も決まった。今まで普通に暮らしてきたのに、どこも痛くないのに、病院に着いて病室に案内されパジャマに着替えると私は急に患者になった。手術などした事もなく出産以外で入院した事もない。これから手術、抗癌剤、放射線と続くであろう治療の時間が永遠に終わらないトンネルのように感じられ家では我慢していた

感情が押し寄せた。

患者になった私はベットの上の居場所にじっとすることができず、病院内を徘徊した。地域医療連携室に相談窓口を見つけると私はこれからの治療や生活に対する不安を吐露した。小さな子供がいるか、介護が必要な親がいるか、金銭的に困っていないか、問われることはすべて該当しない。来る場所ではなかったのだと感じ、四人相部屋のベットに戻ると私は間仕切りカーテンを閉めた。

「Hさぁん、少しお話しましょうか。」カーテンの向こうから柔らかい声がする。相談室から連絡がいったのだろう看護師さんが病室から出た面会室で話を聞いてくれた。私はただただ、この先待ち受ける治療のトンネルが怖くて怖くて仕方なく子供のように泣いた。気持ちが塞いでしまった私の堂々巡りのような話に看護師さんは何人も代わる代わる親身になって寄り添ってくれる。泣きながらまだ若い看護師さんの手を眺めた。きっとうちの子供達の方が年齢が近いのだろうな。そんな若い方に迄こんなに慰めて貰うなんて。泣きながら白く細い指先を眺め、病気に負ける訳にはいかない、まな板の上の鯉だと腹をくくった。

「Hさん、リンパ取りましたよ。」執刀医は手術前の説明通り術中にリンパへの転移を確認しリンパ切除を行っていた。脇のあたりから管が出て黄色い液体がビニールパックに入っていく。看護師さんが術後の消毒やたまったリンパ液の処理で患部のガーゼを取っても私は傷口を怖くて見ることができない。自分で傷口の様子をみるように医師からは促されていたものの顔をそむける私に「術後も綺麗ですよ。安心してくださいね。」看護師の優しい言葉にまたしても涙が溢れた。過度に傷口を怖がり、右半身をこわばらせてトイレ迄廊下を歩くたび、看護師長は「まるでペンギンみたいね。」と笑う。他の患者は平気なのかと不思議に思ったが、部屋に来る看護師さんは優しく「個人差がありますよ。日にち薬ですから。」と安心させてくれた。

全ての治療を終えてからもう七年経つ。入院中の事を思い出すと後にも先にもあんなに泣いて、他人に優しく慰めて貰った事など無い。白衣の天使という表現は患者になって初めて本当だと実感した。私は沢山の天使達に泣きながら気持ちを吐露し、優しく癒され、長い治療を続けていく力をもらった。せめてもの恩返しの気持ちで今、コロナにかかって医療従事者に迷惑をかけることが無いよう気をつけて生活している。普段の生活を取り戻すと飛び去ってしまう白衣の天使への感謝の気持ちを忘れずにいたい。

中高生の部

最優秀賞

福岡市・高校２年
松元 章浩

「在宅医療を通して得たもの」

今年四月、祖父は自宅で家族に囲まれ、穏やかに八十八歳の生涯を閉じた。昨年の八月に吐血して近くの病院に運ばれ入院。翌日、学校帰りに病院に寄ると、担当の先生からお話しがあるところだった。「膵臓癌がかなり進行した状態の可能性が高いと思います。ご高齢でもあり、ご本人の意志を大切にしながら可能な治療法を検討していきましょう。」とのお話だった。人は誰しも死ぬのは当然のことだが、僕にとって近親者の死をしっかり意識するのは初めてのことで、ひどく困惑した。しかし、この日の「ご本人の意志を大切にしながら」という先生の言葉で、不思議と気持ちが冷静になり、病に倒れた祖父に、家族と共に僕も寄り添っていこうという気持ちが自分の中に芽生えた気がした。

祖父の癌は完全に摘出することが困難な状態になっていた。高齢をおして抗がん剤治療をすると逆に余命を縮めかねない。「できるだけ自宅で過ごしたい」という本人の願いを受け、在宅療養を目指すことになった。その後、胃と小腸をつなぐ手術を受け、量は少ないが口から自分で食べられるようになった。ケアマネージャーの方やリハビリの先生が自宅の状態を見に来て下さり、介護ベッドの搬入、風呂や廊下の手すりの設置など、少しでも祖父が快適に過ごせるようにアドバイスを頂いて、在宅療養への準備を進めていった。

十一月の初めに退院し自宅に戻った祖父は、何となく表情がほぐれて安心した様子だった。それから、週一回の医師による訪問診療、週三回の訪問リハビリと看護が始まった。訪問診療の医師は、若々しいが落ち着いた話し方で、自然や山歩きが大好きな祖父の趣味を知り、「玄関に咲いている花は良い香りですね。なんという花ですか？」「どの辺りの山に登られていたのですか。」等、訪問の度に親しみを込めて話しかけて下さった。祖父だけでなく、祖母をはじめ家族にも、困っている事や心配な事はないかといつも気遣って下さり、回を重ねる毎に祖父も家族も信頼を深めていった。リハビリや看護

の方々は、体の硬直を防ぐ全身のマッサージや足浴、体調の観察など、気持ちよく過ごせるよう尽力して下さり、祖父もそれを楽しみにしていた。

その頃の祖父は、昼間は大好きな庭の手入れをしたりして過ごし、夕方や休日には僕と将棋をしたり、僕が車いすを押して近所を散歩して過ごした。入浴や身の回りの世話で忙しい母に代わって父が夕食の支度を担当してくれることも多くなった。就寝前には祖母によるマッサージが恒例で「有難う、有難う。」と言いながら眠りについていた。このように、医師や医療スタッフの方々に支えられて、祖父本人だけでなく、僕たち家族も穏やかな気持ちを保つ事ができ、本当に家族一丸となって祖父の思いに寄り添いながら日々を過ごせたことに心から感謝している。

当初は年末までもたないかもしれないと言われていたが、年を越すことができた。医師からは、「奇跡的です。お花見にも行けそうですね。」と言われ、本当に車で太宰府へ梅の花見に行き、祖父はとても嬉しそうだった。三月になると新型コロナウイルスの影響で学校が休校となり、自宅で一緒に過ごす時間が増えた。四月に入ると、祖父は一日のほとんどをベッドで過ごすようになり、医師からは、病状が進行して最期の時が近づいてきている事、今後どのような変化が起きてくるかなど、易しい言葉で家族に話があった。いよいよかという寂しい気持ちでいっぱいになったが、それでも現実をしっかりと受け止め、僕達はより長く祖父と過ごすようになった。

四月上旬のある日、祖父は「自分はもう危篤だから、お礼とお別れの電話をしたい。今日のうちにしておかないと間に合わないような気がする。」と言い、兄弟や大学時代の同級生などに次々と電話をかけ、涙を流しながら感謝とお別れを伝えていた。二日後、家族も周りに居る中、看護師さんと僕で全身の清拭と着替えをした。祖父の体は驚くほど痩せていたけれど温もりを感じることができた。「ではまた夕方来ますね。」と看護師さんが声をかけ一緒に祖父の顔を覗き込むと、大きく息をして、そして息が止まった。祖父は本人の願い通り、家族に囲まれて自宅で穏やかに最期を迎えた。祖父の傍で限りある日々を一緒に過ごせたことは、心に残る宝物である。

この事を通して、治療が困難な状況になっても、病気と共にその人らしい穏やかな時を過ごせるようアドバイスや手助けを惜しまず尽力して下さる方達の存在を知った。在宅医療を受ける患者の家族となり、医師や医療スタッフとの信頼関係に支えられて、患者本人だけでなく家族もどれほど勇気づけられるか身をもって体験できた事は本当に貴重な経験となった。この感謝の気持ちを忘れず、これからの人生を歩んでいきたいと思う。

中高生の部
優秀賞

北九州市・中学１年
石山 由理

「出会いが夢へ」

「痛くないところを探してあげるからね。」
と、緊張している私に先生はいつも優しく声をかけてくれた。まだ幼稚園児だった私は、注射が苦手だった。「注射はどこにしても痛いに決まってる。」と心の中で私は思っている。

「一、二、三。はい終わったよ。」
と先生に言われ、体の力が抜ける。「あれ、チクッとしたけど本当に痛くない。魔法のようだ。」と私は驚いたのを覚えている。私は先生が大好きになった。体調が悪くなると、すぐ先生の顔が頭に浮かぶ。それは今も同じだ。

私のかかりつけの小児科は、いつも混雑していた。子供の泣き声でにぎやかなときもある。でも先生の部屋は違った。すごく忙しいはずなのに、先生はいつも笑顔で、そこだけゆっくりと空気が流れているようだった。そして診療室を出るとき、私は必ず安心という薬をもらっていた。本当にすごい。私は先生にあこがれるようになった。「私も先生のようになりたい。」と思った。学校で「将来の夢」を聞かれると、「小児科の先生。」と答えるようになった。

数年後、また自分の将来について考える機会となる事件が起こった。体に腫瘍が見つかり、手術することになったのだ。

初め、校医の先生の病院に行った。すぐに小児科の充実している大きな病院を紹介された。簡単に考えていた私は驚き、不安になった。でも、校医の先生が私の顔を見て、なぜ大きな病院に行く必要があるのかを丁寧に説明してくれた。私は納得して、次の病院に行けた。

次の病院の先生も女性の先生だった。かっこいい印象の先生は、ありのままのことを教えてくれた。入院して検査することになった。

入院当日、私の大嫌いな点滴からスタートした。なかなか針が入らず、主治医の先生や看護師さんが集まってきた。怖がる私を、みんなで励ましてくれた。次はＭＲＩ検査だった。大きな音がしたり、狭い所に入るので、主治医の先生が心配して、ずっと付き添っ

てくれた。検査は意外と楽しく、私は冷静だった。主治医の先生や検査技師さんのお陰だ。

主治医は女性の研修医の先生だった。初め私は、「研修医の先生で大丈夫なのかな。」と疑ってしまった。でも、とても親しみやすくお友達のように色々な話をしてくれて、楽しい時間を過ごせた。

検査結果が出た。今度はベテランの先生も一緒だ。チームで患者の治療方針を考えるらしい。私は学校の班活動と同じだと思った。手術が必要で、症例数の多い病院への転院を勧められた。「手術」と聞いても他人事のようだったが、どうなるか怖くなった。

私は初めてレントゲンを見た。頭の中はクエスチョンマークで一杯だった。主治医の先生と先輩の先生が、なぜ手術が必要か一つひとつ丁寧に説明してくれた。クエスチョンマークがどんどん消えていった。そして、すぐに次の病院での診察日が決まった。

手術をした病院も大きな病院で、沢山の科があった。案内図をもらい、色々な科で検査をした。「この病院ではどれ位の人が働いているのだろう。」と思った。とても大きなチームだ。

私はこの病院で、忘れられない看護師さんに出会った。手術日が決まり私の心が爆発しそうだったとき、太陽のような笑顔で話しかけてくれた看護師さんだ。優しそうな目が「大丈夫だよ。」と言っていた。

人生初の手術、テレビドラマの世界だった。私の手術のためのチームがそこにあった。執刀医の先生は私の将来のことも考え、傷が目立たない方法を選んでくれた。

私は半月の間に、三つの病院を受診、二回入院して手術をし、退院した。スピード解決だった。私の為に、病院の枠を超えて先生方がたすきを次々とつないでくれたからだ。どの先生にも共通していることがあった。それは、患者とまっすぐ向き合い、ごまかさないこと、そして納得して治療ができるように、子供の私にも丁寧に説明してくれたことだ。

看護師さん、検査技師さん、薬剤師さんなど、医療従事者の方にも共通しているのは、患者やその家族の人の心に寄り添い、不安を和らげてくれることだ。知識や技術はとても大切だと思うけれど、私は今回、コミュニケーション能力、そして相手を安心させる笑顔も大切だと思った。

一人の患者の為に、各専門の人が集まりチームとして動く、病院の枠を超えて地域で協力して治療をする、とても素敵なことだと実感した。私たちが安心して生活できるのは、病気になった時に助けてくれる医療従事者のみなさんがいるからだ。私もそんな仕事がしたい、人に安心を与えられる人になりたいと思った。「医療従事者となって、沢山の人を助けたい」――私の将来の夢が広がった。

中高生の部
優秀賞

宮若市・中学３年
松元 那和

「他人事」

「運動器検診」。

今までは何も気にしていなかった。普通なら何事もなく終わるはずだったのに、私はこの検診結果が中学校生活のほとんどに影響した。

中学校に入学する際、「運動器検診」という検診を受けた。検診といっても、健康診断のように病院に行って採血をして心電図の検査をして…といった細かい数値を出す検査ではなく、前屈や片脚立ちはしっかりとできるか、しゃがむときに痛みはないかなどといった簡単なチェックのようなものだった。今までも何度かしてきたことだったので、私は特に何も考えずチェックしていった。

「じゃあ前屈して〜」

と言われ、前に腰を曲げたとき、母が私の肩甲骨に左右差があることに気がついた。もう一度まっすぐに立ちなおしたときにも肩の位置が左右で違っていたため、違和感を覚えたが、それほど大きな違いではなかったため、それからもいつも通りの日常生活を送った。

数日後学校から近くの病院で診察してもらうように言われた。私自身は特に痛みなどはなく、きっと姿勢が悪くて少し変形してしまったんだろう、ランドセルをいつも片方の肩にかけていたからかな、と特に心配などはしていなかった。いつも行く病院で普段通り小児科のボックスに診察券を入れて名前を呼ばれるのを待っていると、整形外科に行くように言われた。整形外科で名前を呼ばれ、診察室に入ると先生はすぐ「脊椎側彎症」という名前を口にした。聞いたことはないし正直なんて言ったのかわからなかった。とりあえず何かの病気なんだということだけは理解できた。段々話を聞いていくうちに悪化していくと手術を受けないといけなくなるということが分かった。私はそのことを聞いてからもどうせ経過観察で済むんだろうと思っていた。けれどちゃんとした検査を受けた方がいいといわれ、側彎症専門の先生がいる病院を紹介してもらった。

病院に行くとレントゲンを撮り診察に移った。撮ったレントゲンを見てみると、自分の写真なのか疑うような背

骨のレントゲンが映っていた。角度は二十五度くらいでS字に曲がっていた。それから定期的に通院し、装具を作ることが決まった。しかし、きつい装具をつけても進行は収まらず手術をしないといけなくなった。最初は軽く考えていたことが手術にまで進んでしまうとは考えていなかったのですごく動揺した。でも過ぎてしまった日々はどうにもならないし、断りかけていた手術を受けることになった。

本当に怖かった。自分とは無縁だと思っていた手術。話が進んでいくたびに不安になっていった。でもそんな中、病院の先生はとても明るい人で、恐怖心もそれまでよりは減っていった。今思うとあの病院でよかったなと思う。セカンドオピニオンの話を聞いて比較的近くの病院にも行ったが、やはり元の病院にしようと決定した。初めに決めていた病院の方が大きい病院で、もし何かがあっても心配しなくていいと思ったし、何より安心感があった。主治医の先生の対応がとてもよく、看護師の方も明るく接してくださっていた。でも貯血は辛かったし、手術の直前までずっと怖かった。手術室に初めて入るとき、看護師さんがずっと手を握っててくれて、全身麻酔のマスクをつける直前まで一緒に頑張ろうと言ってくれて。それから手術は上手くいったらしい。背中に三十センチほどの傷跡は残ったが、調べたり聞いたりしていたほど目立つものではなかったのでとても安心した。術後すぐは今までに感じたことのない激痛に襲われ、なんで手術を受けたんだろうと後悔していた。寝返りも打てず、背中以外のところにも影響は出た。怖くて痛くて辛くて。でも看護師さんや親が近くにいてくれて、ずっと寄り添っていてくれたおかげでどうにか乗り越えることができた。今思えばよく耐えたなと思う。身長も四センチ伸びて背中の出っ張っていた部分も前に比べれば全然目立たなくなった。もうあの固い装具をつけなくていいし、それを馬鹿にされることもなくなる。一つの大きな山を越えたことでこれから先が明るくなった気がした。

今まで耐えて頑張ってこられたのは、もちろん親のおかげでもあるし、何より主治医の先生や看護師さんのおかげだと思う。信頼できたからこそ今があるし、この病院でよかったなと思う。

運動器検診がなければ見つけることはもっと遅れていたと思うし、医療従事者の方々のおかげで病気を治すことができた。この検診を適当に済ませている人がもしいたら、他人事などと言わずしっかりと意図を理解して受けてほしい。そして何かあれば信頼・安心できる病院をしっかり見つけてほしい。

小学生の部

最優秀賞

飯塚市・小学２年
新田 一叶

「わたしのお母さんは強い人です」

わたしのお母さんは、きょ年の十一月に天国へ行きました。

お母さんは、すいぞうガンと言うびょう気とたたかっていました。

おなかがいたくて、くるしくて、つらそうなおかあさんのすがたはたたかっているように見えました。

そのすがたを見て、わたしはお母さんをたすけたい、えがおにしたいと思いました。そして毎日をがんばって生きて、お母さんをあんしんさせたいと思いました。

お母さんはこのびょう気になり、しゅじゅつをうけました。

たくさん入いん、たいいんをくりかえしました。たくさんちりょうをしました。

ちりょうのふくさようで、かみの毛もぬけていました。たくさんおうとしてくるしそうでした。

くるしかっただろうけれど、お母さんがちりょうをがんばれたのはおいしゃさんやかんごしさんたちがはげましてくれたからだとわたしは思っています。

しゅじゅつの前の日おいしゃさんはお母さんに「だいじょうぶ、一叶ちゃんのためにもかならずせいこうさせる」と言っていました。そして、おいしゃさんはわたしに「お母さんはだいじょうぶだからね。」と言ってくれました。わたしはすごくあんしんしました。

十七時間のしゅじゅつをしてぶじにせいこうしました。わたしはお母さんがぶじであることが心からうれしかったです。

しかし、一年後にちがう場しょにガンが見つかりました。お母さんはすごくおちこんでいました。その時にかんごしさんが話を聞いてくれてはげましてくれたそうです。わたしは入いんしているお母さんのそばに話を聞いてくれるかんごしさんがいてくれてとてもあんしんしました。それからお母さんはたくさんちりょうをしました。できるちりょうがなくなるまでやりました。お父さんは何かたすかるちりょうがあるとあきらめませんでした。しかしお母さんはお父さんに「ありがとう」と言って、ちりょうはもうしたくない。家ぞく三人ですごしたいと言ったそうです。

そしてざいたくかんごをすることになりました。お母さんはいつもベッドにいました。今まで自分でできていたことができなくなっていました。わたしとお父さんはかんごしさんといっしょにタオルをもっていったりおてつだいをしました。そのときのお母さんはとてもおだやかに見えました。

それから半月後にお母さんは天国へ行きました。でも、わたしの心の中にはいつもお母さんが生きています。

そして、おいしゃさんやかんごしさんたちにはびょう気の人たちをはげまして、たすけてほしいとねがっています。

小学生の部
優秀賞

福岡市・小学６年
伊藤 利花子

「次は私がきっと」

右下腹部に今まで経験した事がないような痛みが走った。あまりの痛さに意識がもうろうとし、立つ事も出来なくなっていた。今年の三月九日、私が初めて救急車で運ばれた時の出来事だ。この日私はたくさんの人々に助けてもらった。

一人目は、救急医療電話相談窓口の方だ。顔面そう白になり、苦しむ私を見た母が、

「盲腸かもしれない。」

と、あわててそこに電話をかけていた。病院が閉まっている時間帯だったので、朝まで様子を見るべきか、救急車を呼ぶべきか相談していたのだ。現状を説明したところ、すぐに病院に行く事をすすめられた。専門家の冷静な判断で、あわてず母は救急車を呼ぶ事が出来た。

次に助けてもらったのは救急隊員の方々だ。立ち上がる事の出来ない私を軽々と担かで持ち上げ、救急車に乗せてくれた。苦しむ私の血圧や心拍数を測りながら、動ようする母に、

「すぐ病院で診てもらえるから大丈夫ですよ。」

と、優しく声をかけてくれた。救急車が病院に向かい走り出すと、車を運転している知らない誰かも私のために道をゆずり、協力してくれたのだ。

病院に到着すると救急隊員の方々から病院の方々へ、バトンタッチ。ドラマでは緊急外来といえばあわただしく医師たちがかけ回わっているイメージだ。しかしその病院の先生は、私を笑顔で出むかえ、

「すぐ調べてあげるからね。」

と、優しく声をかけて、さっそく検査に取りかかってくださった。検査の結果を待っている間、看護師さん達は湯たんぽでお腹を温めたり、さすったり。

「痛いね。早くよくなるといいね。」

と、ずっと側で声をかけていてくれた。

検査の結果が出て先生が、

「ここに黒い影が見えるのが分かりますか。」

とおっしゃると、私も母も息を飲んだ。何か悪い病気なのかと不安が頭をよぎった。先生は続けて、にっこり笑いながらおっしゃった。

「安心して下さい。これは便です。トイレに行けば治ります。」

私も母も安心すると同時に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。コロナ禍で医療従事者は感染リスクを抱えながら働いている。そんなひっ迫した状況にも関わらず、私が申し訳ないという気持ちを伝えると、また笑顔で、

「重しょうじゃなくてよかった。死ぬほど痛かったんだもんね。気にすることないよ。」

と言ってくれた。

私はこの経験を通して、けん身的な医療従事者など、多くの人に支えてもらっている事に気付かされた。私も将来、そんな助ける側の人間になりたいと強く思う。そして今度は私が病気で苦しんだり不安な人をはげましてあげたい。

小学生の部
優秀賞

北九州市・小学４年
三浦 一真

「ぼくの先生」

　ぼくは、体調が悪くて、毎月病院に行きます。病院では、先生がたくさんしつ問してくれます。先生がぼくの様子を観察しながら、しつもんしてくれるのがよく分かります。
　でもぼくは、ニコニコして何も答えないでいました。一ヶ月に一回しか、先生と会わないので、はずかしい気持ちと、先生にぼくの事をあまり知られたくない気持ちでいっぱいだったからです。先生もお母さんも困ったなぁという顔をしていました。
　先生も色々考えてくれて、しんさつの前に、ぼくと遊ぶ時間を作ってくれました。
　ぼくのためにここまでしてくれたことがとってもうれしかったけど、それでもまだ先生とは、話すことができませんでした。今考えても、先生に話すことができない自分の気持ちが、よく分かりません。
　そんな事が十ヶ月くらい続きました。ずっとこんな感じかなぁと思っていましたが、急に引っこしをする事になりました。
　しんさつが終わった後の会計フロアーで待っている時、急にさみしくなり、お母さんに、
「先生に会えるのはあと何回。」
と聞きました。するとお母さんは、
「今日のしんさつが終わったからあと二回よ。」
と言いました。ぼくは、先生に会えなくなるのがさみしいと思いました。
　次のしんさつの時、最初に、いつものように先生が遊んでくれました。ぼくは、先生のしつ問に少しずつ答えられるようになりました。
　最後のしんさつの時、ぼくはとてもさみしくて、もっと先生に話しをしておけばよかったと、後悔しました。しんさつが終わった時、思わずお母さんのうでを、ぎゅっとにぎってしまいました。
　先生は、ぼくがどんなじょうたいでも、やさしくぼくの話すのを待ってくれました。うまく答えられなくても、
「教えてくれてありがとう。」
と、いつも言ってくれました。
　先生がいろんな事を教えてくれて、ぼくの気持ちを大切にしてくれた事で、ぼくは、自分の体を守る事ができました。
　ぼくだったら、ぼくのように何も答えずごまかすようなたいどの人が来たら、
「話してくれないと何も分からないから、しんさつ終わり。」
と言いたくなると思います。
　なので、先生には、感謝の気持ちでいっぱいです。先生から、待つ事の大切さを学びました。そして、話をていねいに聞いてくれる事が、こんなにうれしくて安心できることだと知りました。なので、ぼくも困っている人がいたら、先生みたいに安心して話を聞いてあげたいなと思いました。

小学生の部
優秀賞

福岡市・小学６年
平川 沙英

「障害者との暮らし」

私の妹は病気を持っています。それは生まれたときから持っているもので、治ることはありません。妹は、同じ病気の中でも、特に症状が重い方で、呼吸、食事、お風呂など、一人では出来ないことがたくさんあります。さらに、目が見えず、体も動かせません。なので、いつも寝たきりです。

生まれてから二年間はずっと病院で生活していました。今は退院して、在宅医療を受けています。

妹は、機械が無くては生きていけません。呼吸をするのも、食事をするのも、全て機械にたよっています。家の中には、妹のための機械がたくさん置いてあります。遊びに来た友達に、

「救急車の中みたい。」

と言われたことがあるくらい、機械が置いてあります。

また、お世話も大変です。寝返りをさせたり、薬をあげたり、他にもたくさんあります。

特に、お母さんとお父さんは大変です。毎日夜中の三時頃に起きて寝返りさせてあげています。寝ている間、寝返りを一度もしない人はいないでしょう。それは妹も同じです。妹も、定期的に寝返りをしてもらっているのです。しかし、この仕事は睡眠時間がけずられるので、とても大変な仕事です。その分、私は、昼のお世話を手伝っています。

また、他にもお世話を手伝ってくれる人がいます。訪問看護師の方々です。ほぼ毎日、交代制で二人の看護師さんが来てくれます。看護師さんが来ている時間が、唯一の出かけられる時間なのです。

さらに、週に何回か、妹をあずかってくれる施設もあります。施設では、折り紙やお絵かきしているそうで、毎回写真が送られてきます。また、家族全員で出かけることもあります。妹を、「バギー」と呼ばれる特別な車いすのようないすに乗せます。もちろん、機械も乗せます。このバギーには、重い機械が乗っても大丈夫なような荷台が設けられているのです。車も、バギーを乗せることができるような車です。また、出かける先も考えなくてはいけません。バギーで入れるか、段差がないかなどをしっかり調べないといけないのです。車いすで入れない、段差のある施設を見ると、私は少し悲しくなります。確かに、妹のような人たちが公共施設を使うと、他の人のじゃまになるかもしれません。迷惑かもしれません。けれど、この文章を読んで、

「こういう人もいるんだ。」

と理解し、やさしく受けとめてくれる人が一人でも増えることを私は願っています。

選考委員

福岡県教育委員会
薄井　純一

西日本新聞社社会部編集委員
下崎　千加

筑紫女学園大学名誉教授
中村　萬里

福岡県医師会副会長
堤　康博

福岡県医師会理事
西　秀博

福岡県医師会理事
原　祐一

福岡県医師会理事
佐藤　薫

福岡県医師会理事
青柳　明彦

募集要項

●医療従事者と患者さん、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集します。

●400字詰め原稿用紙３枚～５枚以内（1,200～2,000字）
鉛筆（Ｂ、２Ｂ）／ボールペン／万年筆／パソコン／ワープロのうち、いずれかを用いて、濃くはっきり書く。
※パソコン・ワープロの場合、１ページ400字（20字×20行）。

●表紙をつけて、部門、題名、〒住所、氏名（ふりがな）、年齢（生年月日）、性別、所属、電話番号、ＦＡＸ番号を明記して下さい。

●福岡県内の学校に在籍する児童生徒、および一般県民
※医師を除く

●自作の未発表作品に限り、盗作、二重投稿は固くお断りします。
※応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。

●応募作品は返却いたしません。

●入選作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。
※そのため主催者、後援者がインターネット上で開いているページや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。

●【一 般 の 部】最優秀賞　１名
優 秀 賞　若干名
【中高生の部】最優秀賞　１名
優 秀 賞　若干名
【小学生の部】最優秀賞　１名
優 秀 賞　若干名
受賞者には賞状と副賞を授与いたします。

【問い合わせ】福岡県医師会総務課　作文コンクール係（TEL 092-431-4564）

主催：公益社団法人福岡県医師会
共催：福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社
後援：九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）

令和３年２月発行
公益社団法人福岡県医師会
〒812-8551　福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30
電話：092-431-4564　ＦＡＸ：092-411-6858

FMA